

571 中央大学記念日学生大会

〔「法学新報」第29卷11(336)号 大正8年12月1日〕

○中央大学記念日学生大会 去月十一日中央大学にては其創立記念日を卜し恒例に依り其大講堂に於て午後一時より学生大会を開催したるか定刻一同の著席するや法科三年上村清敏君は「本日は吾中央大学の誕生日にして吾吾は最も喜悦に満つる貴き日であり而も一一、一一の日に当るは世界中の最尊を表徴するものである故に吾吾は一層の努力勉勵を以て世界的に優秀なる文化の展開に貢献せねはならぬ」旨開会の辞を述ふるや喝采暫く止まず其降壇するや理事馬場鏝一先生学長に代り記念講演を試みられたるか其要旨は「只今の開会の辞の中に本日は目出度記念日なれば各自充分に快を尽され経済問題も労働問題も論議するに及はぬとあつて茲に記念講演を為すは稍其所と時を得ぬ讒を免れぬかも知れされと一言を敢てせん考へてある惟ふに今日は本学は既に三十四年の星霜を閲して居るので歴史的に可成古きものである従て吾人は本日の記念日に当り一層其悦ひを深くするのである而して現在の卒業生は八千に上り在學生は四千数百名である併し此点は都下大学中第一なりとは言へぬ、けれども其實質の点に於ては優に一等地を抜んで居るのである本学か現今の如き隆盛を来すに至つたに付ては固より一つの原因があるのでそれは三十四年間変はることなかりし本学の学風

に外ならぬ其学風といふは即ち本学の特色たる真面目―質実剛健―の校風に起因するものであると信せざるを得ないのである。然り而して此学風こそ実に今日我国の最も痛切に要求する所の大切な国民の心掛であるのである。蓋今日の我社会に於ては輕薄の風漸く其勢を成し上下共に実を忘れて華を競ふといふ有様であるか故に本学の学風は此社会の滔滔たる流弊を救ふべく夙に識者に依りて要求せられ居る所のものである。回顧するに我国民は元來爾く輕薄なるものではなかつたのである。仏教の渡來、儒学の伝來、泰西文化の輸入等に際し常に相當の考慮を巡らし彼の長を探る為め我本領を没するか如きことなかりしは我國民に堅實なる思想の牢乎として抜くべからざるものかあつたからである。然るに近來は種種なる外来思潮の悪影響を受け吾吾の寒心に耐えざるものがある。抑世界改造の思潮は実に世界の大勢ではあるか併し吾吾國民たるものは欧米の思想論議を其儘我國に宣伝せず其利害得失を充分に真面目に省察して之を日本化するの覚悟かなければならぬと思ふ。且吾人は日常百般の事柄に付ても終始真面目ならざるべからず彼の電車の焼打、交番の焼打等の如き少しく真面目に考へれば吾人の公有物を破壊するもの。結局自分等の不利益に帰することは明白である。又「デモクラシー」其他の思潮に付ても先づ以て我國家の如何なるものであるかを顧慮することを要するのである。共產主義並に労働問題等に付ても能く能く考へて進むべきには進み採るべきは採るべく其然らざる点に付ては断して附和雷同せぬやうにあり度いのである。要する其面目に一切の事を為さねばならぬ。然るに其

大切な真面目といふのか恰も我大学の三十有余年間養ひ來つた所の校風であるのである。小さい例を挙げて見ても本学の運動部の如き擊劍柔道といふやうなものは大に奨励するけれども世間で往往広告に利用する野球の如きものは其設備をしてないのである。而して斯る善美なる校風は本学創立以來今日迄の当局並に出身者諸君の学界に遺された成績である。然らば其相続人たる吾吾は此質実剛健の校風を維持し愈々益々其精神を發揮することに努力する為め周到なる注意と固き決心とを要し斯くて臆て之を以て國家の進運に貢献せねばならぬことは現在の理事者並に学生諸君の責任であると信する云云」と云ふに在りて其了るや満場破るるか如き拍手に送られて降壇せられ右にて式を終へ夫れより直に余興に移り丸一一座の太神楽、貞山の講談、永田錦心の薩摩琵琶等或は奇術眼を驚かし或は滑稽頭を解かしめ或は人心を鼓舞感奮せしむるものあり更に十数番の学生余興に進み愈々佳境に入る五時に及んで校内数个所に設けたる模擬店を開き大福、うどん、そば、おでん等各店孰れも大雪崩の襲來に逢ひ大入繁昌にて一同十二分の歡を尽し更に夜に入りて数番の余興あり其喝采声裏に演了し中央大学の万歳を三唱して散會したるは午後八時を過く因に当日は不幸にして終日雨天なりしにも拘はらず來賓並に学生の出席したる者二千余名に上り頗る盛會なりし（委員報）